

西夏語の他動詞文における分裂型格表示について

小 高 裕 次

0. はじめに

本稿の目的は、西夏語の他動詞文における分裂型格標示の問題について、有生性の関与という観点からの考察を行なうことである。

0. 1 西夏語には、助語(𐽀𐽁 na mɛ 語-助)と呼ばれる一群の格標識が存在する。西田(1966, 1989)、Кепинг(1985)、Софронов(1968)等は、次のような格標識を挙げている。

•

- (1) 被 tafi 主題標識
- (2) 被 ɲu 具格「～をもって」
- (3) 被 ʔafi 於格
- (4) 被 ndɔfi 場所格「～に、～において」
- (5) 被 ʔu 内格「～の中で、～の中から」
- (6) 被 khaɸi 中間格「～の間に」
- (7) 被 rɪr 随伴格「～と」
- (8) 被 mbɪuɸi 随従格「～にしたがう」
- (9) 被 lɪɛ 方向格「～に向けて」
- (10) 被 su 比較格

本稿で取り上げる助詞 𐤙𐤥 *ʔyefi* はそうした格標識の中の一つであり、しかも最も頻繁に使用されるものである。しかし、西夏語の格体系における助詞 𐤙𐤥 *ʔyefi* の位置づけについては研究者ごとに意見が異なっており、未だ意見の一致を見ない。その理由として、次のような二つの問題点を挙げることが出来る。

0.2 第一に、助詞 𐀓𐀕𐀆 *ʔyeŋ* が標示する格範疇の多様性の問題である。

助詞 禰 [?]yeŋ は、12世紀中頃に西夏人の手によって作られた韻書『文海』に、

- (11) 孫 纘 錫 彥 錕 訖 孫 錕 孫 勳 躬 膝

ʔyeh̄ tɑh̄ mʋʌN m̄l̄ē stsheh̄ nɑh̄ ʔyeh̄ h̄ŋɑh̄ ʔyeh̄ ʔyɪ̄ nɑ-mb̄ē

禱 主題 属する者 示す 汝 禱 我 禱 謂 語 助

禰は、もつ者を示す。汝の、我の、の意味である。助語。 (「文海」48.152)

(12) 𢇛 𢇛 𢇛 𢇛 𢇛 𢇛

(『大方廣華嚴經』、以下「華」I, 3, 20)

(13) 嬌 妍 韶 麗 靜 賢 媛

衆生に安樂を与えることができる

(14) 形勝膝發隆勝膝織勝膝繡福福孫織葵

あらゆる微浄天・無量浄天・普浄天衆を普観する

0. 3 第二の問題点が、本稿で扱う属格・与格・対格における分裂型格標示である。先に述べたように、西夏語の助詞 𐽧 ʔyeŋ は属格・与格・対格を標示する。ところが、西夏語では、助詞 𐽧 ʔyeŋ を用いずに語順のみで属格・与格・対格を標示することもできる。例：

(15) 屏攷 熈鞅 熈 駟歸席 駟羣 熈羣

涼州の塔は、阿育王の舍利を分け…

(16) 覓膝膝膝膝膝膝膝膝膝

あらゆる諸天子に生受善根を開示し…

(17) 敗 徬 莖 耕 廂 廂 廂 徬

光明が世間一切を普照し…

— 107 —

(18) NP- 𐵓 𐵙ef

(19) NP- ∅

という分裂型格標示が見られるのである。

それでは、助詞 𐵓 𐵙ef を用いた例と用いない例との間の差違は一体どこにあるのだろうか。このことについて言及しているのは、Софронов(1968)だけである。彼の、助詞 𐵓 𐵙ef が与格の助詞であり、助詞 𐵓 𐵙ef を用いた場合は与格、用いない場合は属格または対格であるとする説は、一見明快ではある。けれども、例えば次のような例：

(20) 𐵓𐵙 𐵙ef

mɿɛ lef

夢 見

夢を見る

(21) 𐵓𐵙 𐵙ef 𐵙ef

thaf 𐵙ef lef

仏 見

仏を見る

において、動詞 𐵙ef ”見る”の目的語が(20)では「対格」で標示され、(21)では「与格」で標示されているのはなぜか、という理由についての説明はなく、助詞 𐵓 𐵙ef を用いた例と用いない例との間の差違は依然として不明のままである。

0.4 西夏語におけるこのような分裂型格標示の原因の一つには、仏典や碑文などの二言語併記テキストでは、もう一方の言語(主として漢語)の行数や字数にあわせるために西夏文の助詞が省略されるということも考えられる。特に翻訳仏典における西夏語とオリジナルの西夏語との関係は、ちょうど、いわゆる普通の日本語と漢文における書き下し文のような関係になっており、若干文体が異なっている(西田, 1975)。しかし、西夏語の属格・与格・対格標示における分裂型格標示には単なる省略や文体の問題ではないことを示すいくつかの特徴が見られるのである。

例えば、助詞 𐵓 𐵙ef は原則として一文中に一度しか用いられないという点が挙げられる。例：

(22) 𐵓𐵙 𐵙ef 𐵙ef 𐵙ef 𐵙ef 𐵙ef

ʔyif-vif ɣuf-ɣuf 𐵙ef tʃhi ni-mow

衆 生 あらゆる 𐵓 根 普-観る

あらゆる衆生の根を普観する

(華Ⅱ, 3, 3-4)

上の例では、𐵓𐵙 𐵙ef 𐵙ef 𐵙ef 𐵙ef ”あらゆる衆生”と𐵙ef tʃhi ”根”が限定・非限定の関係、𐵙ef tʃhi ”根”と𐵙ef ni-mow ”普観する”が動詞と目的語の関係になっており、可能性としてはその両方に助詞 𐵓 𐵙ef を用いることができるはずであるが、実際には、例に示したように助詞 𐵓 𐵙ef は一度しか用いられていない。テキスト中では、若干の例外を除き、助詞 𐵓 𐵙ef は一文中に一度しか用いられていないのである。その場合も、ほとんどが重文での例であり、助詞 𐵓 𐵙ef が二度使用されていると考えられるのは、次の例だけである。：

(23)

zi-ne-ɣkɪě x^{wə̌}-nreh rɪur thaŋ ʔyeŋ maŋ ɣkɪě ŋɪ^{won} ŋuŋ-ŋuŋ ʔyeŋ

普雲音　梵王　諸　仏　誦　声　音　海　あらゆる　誦

殫 姦 報 肅

mbĩe-lhi-ŋaŋ rir

解脱門 得る

普雲音梵王は諸仏のあらゆる音声海の解脱門を得る (華Ⅱ, 7, 21-22)

このような、西夏語の分裂型格標示に見られる特徴の中で、とりわけ、他動詞文に顕著であり、分裂型格標示の問題を解く大きな手掛かりになると思われるのが、次節で述べる有生性の関与なのである。

1. 西夏語の他動詞文における有生性の関与

西夏語テキストにおいて、助詞 𐽄 *ʔyeŋ* が後置される名詞について観察していくと、一つの非常に顕著な傾向が見られる。助詞 𐽄 *ʔyeŋ* は、代名詞、仏や神・人・衆生など人間かそれに類する名詞に後置される例が圧倒的に多い。すなわち、助詞 𐽄 *ʔyeŋ* は有生性(animacy)の度合の高い名詞に後置される傾向が非常に強いのである。

1. 1 『華嚴經』の中で、他動詞文の目的語に助詞 𐰽𐰺𐰍 𐰽yeŋ が後置された例は 199 例あり、そのうち、目的語が有生名詞であった例は、188 例であった。助詞 𐰽𐰺𐰍 𐰽yeŋ は、実に 94.5% の割合で有生名詞の目的語に後置されている。助詞 𐰽𐰺𐰍 𐰽yeŋ は有生性の度合の高い名詞に後置される傾向が非常に強いということが出来るだろう。また、無生名詞や動詞句に助詞 𐰽𐰺𐰍 𐰽yeŋ が後置される例は、第三節の終わりで説明する例を除いて、全て音節数をそろえる必要のある偈言の中で用いられたものであった。

全他動詞中における有生名詞目的語と無生名詞目的語の割合についても、当然、調査する必要があるが、現時点では残念ながら、用例数を明確に示すことが出来るのは、ごく一部の動詞に限られる。

1. 2 その中から、𪛗𪛗 *mow thYuf* “観察する”という動詞を例にとってみると、
『華嚴經』では85個の使用例があり、そのうち 𪛗𪛗 *mow thYuf* “観察する”が固有名
詞中に用いられている4例を除くと、残りのものは次の三つのグループに分類できる。:

- | | |
|---------------------|-------|
| a) 助詞 𐀀 𐀁𐀃を用いたもの | 7 例 |
| b) 助詞 𐀀 𐀁𐀃を用いなかったもの | 6 1 例 |
| c) 目的語なし | 1 3 例 |

このうち a) の 7 例の目的語は全て有生名詞である 羣衆 *ʔyih vwiŋ* “衆生”であった。

例：(24) 𪔐 𪔑 𪔒 𪔓 𪔔 𪔕 𪔖 𪔗 𪔘 𪔙 𪔚 𪔛 𪔜 𪔝 𪔞 𪔟 𪔠 𪔡 𪔢 𪔣 𪔤 𪔥 𪔦 𪔧 𪔨 𪔩 𪔪 𪔫 𪔬 𪔭 𪔮 𪔯 𪔰 𪔱 𪔲 𪔳 𪔴 𪔵 𪔶 𪔷 𪔸 𪔹 𪔺 𪔻 𪔼 𪔽 𪔾 𪔿 𪕀 𪕁 𪕂 𪕃 𪕄 𪕅 𪕆 𪕇 𪕈 𪕉 𪕊 𪕋 𪕌 𪕍 𪕎 𪕏 𪕐 𪕑 𪕒 𪕓 𪕔 𪕕 𪕖 𪕗 𪕘 𪕙 𪕚 𪕛 𪕜 𪕝 𪕞 𪕟 𪕠 𪕡 𪕢 𪕣 𪕤 𪕥 𪕦 𪕧 𪕨 𪕩 𪕪 𪕫 𪕬 𪕭 𪕮 𪕯 𪕰 𪕱 𪕲 𪕳 𪕴 𪕵 𪕶 𪕷 𪕸 𪕹 𪕺 𪕻 𪕼 𪕽 𪕾 𪕿 𪖀 𪖁 𪖂 𪖃 𪖄 𪖅 𪖆 𪖇 𪖈 𪖉 𪖊 𪖋 𪖌 𪖍 𪖎 𪖏 𪖐 𪖑 𪖒 𪖓 𪖔 𪖕 𪖖 𪖗 𪖘 𪖙 𪖚 𪖛 𪖜 𪖝 𪖞 𪖟 𪖠 𪖡 𪖢 𪖣 𪖤 𪖥 𪖦 𪖧 𪖨 𪖩 𪖪 𪖫 𪖬 𪖭 𪖮 𪖯 𪖰 𪖱 𪖲 𪖳 𪖴 𪖵 𪖶 𪖷 𪖸 𪖹 𪖺 𪖻 𪖼 𪖽 𪖾 𪖿 𪗀 𪗁 𪗂 𪗃 𪗄 𪗅 𪗆 𪗇 𪗈 𪗉 𪗊 𪗋 𪗌 𪗍 𪗎 𪗏 𪗐 𪗑 𪗒 𪗓 𪗔 𪗕 𪗖 𪗗 𪗘 𪗙 𪗚 𪗛 𪗜 𪗝 𪗞 𪗟 𪗠 𪗡 𪗢 𪗣 𪗤 𪗥 𪗦 𪗧 𪗨 𪗩 𪗪 𪗫 𪗬 𪗭 𪗮 𪗯 𪗰 𪗱 𪗲 𪗳 𪗴 𪗵 𪗶 𪗷 𪗸 𪗹 𪗺 𪗻 𪗼 𪗽 𪗾 𪗿 𪘀 𪘁 𪘂 𪘃 𪘄 𪘅 𪘆 𪘇 𪘈 𪘉 𪘊 𪘋 𪘌 𪘍 𪘎 𪘏 𪘐 𪘑 𪘒 𪘓 𪘔 𪘕 𪘖 𪘗 𪘘 𪘙 𪘚 𪘛 𪘜 𪘝 𪘞 𪘟 𪘠 𪘡 𪘢 𪘣 𪘤 𪘥 𪘦 𪘧 𪘨 𪘩 𪘪 𪘫 𪘬 𪘭 𪘮 𪘯 𪘰 𪘱 𪘲 𪘳 𪘴 𪘵 𪘶 𪘷 𪘸 𪘹 𪘺 𪘻 𪘼 𪘽 𪘾 𪘿 𪙀 𪙁 𪙂 𪙃 𪙄 𪙅 𪙆 𪙇 𪙈 𪙉 𪙊 𪙋 𪙌 𪙍 𪙎 𪙏 𪙐 𪙑 𪙒 𪙓 𪙔 𪙕 𪙖 𪙗 𪙘 𪙙 𪙚 𪙛 𪙜 𪙝 𪙞 𪙟 𪙠 𪙡 𪙢 𪙣 𪙤 𪙥 𪙦 𪙧 𪙨 𪙩 𪙪 𪙫 𪙬 𪙭 𪙮 𪙯 𪙰 𪙱 𪙲 𪙳 𪙴 𪙵 𪙶 𪙷 𪙸 𪙹 𪙺 𪙻 𪙼 𪙽 𪙾 𪙿 𪚀 𪚁 𪚂 𪚃 𪚄 𪚅 𪚆 𪚇 𪚈 𪚉 𪚊 𪚋 𪚌 𪚍 𪚎 𪚏 𪚐 𪚑 𪚒 𪚓 𪚔 𪚕 𪚖 𪚗 𪚘 𪚙 𪚚 𪚛 𪚜 𪚝 𪚞 𪚟 𪚠 𪚡 𪚢 𪚣 𪚤 𪚥 𪚦 𪚧 𪚨 𪚩 𪚪 𪚫 𪚬 𪚭 𪚮 𪚯 𪚰 𪚱 𪚲 𪚳 𪚴 𪚵 𪚶 𪚷 𪚸 𪚹 𪚺 𪚻 𪚼 𪚽 𪚾 𪚿 𪛀 𪛁 𪛂 𪛃 𪛄 𪛅 𪛆 𪛇 𪛈 𪛉 𪛊 𪛋 𪛌 𪛍 𪛎 𪛏 𪛐 𪛑 𪛒 𪛓 𪛔 𪛕 𪛖 𪛗 𪛘 𪛙 𪛚 𪛛 𪛜 𪛝 𪛞 𪛟 𪛠 𪛡 𪛢 𪛣 𪛤 𪛥 𪛦 𪛧 𪛨 𪛩 𪛪 𪛫 𪛬 𪛭 𪛮 𪛯 𪛰 𪛱 𪛲 𪛳 𪛴 𪛵 𪛶 𪛷 𪛸 𪛹 𪛺 𪛻 𪛼 𪛽 𪛾 𪛿 𪜀 𪜁 𪜂 𪜃 𪜄 𪜅 𪜆 𪜇 𪜈 𪜉 𪜊 𪜋 𪜌 𪜍 𪜎 𪜏 𪜐 𪜑 𪜒 𪜓 𪜔 𪜕 𪜖 𪜗 𪜘 𪜙 𪜚 𪜛 𪜜 𪜝 𪜞 𪜟 𪜠 𪜡 𪜢 𪜣 𪜤 𪜥 𪜦 𪜧 𪜨 𪜩 𪜪 𪜫 𪜬 𪜭 𪜮 𪜯 𪜰 𪜱 𪜲 𪜳 𪜴 𪜵 𪜶 𪜷 𪜸 𪜹 𪜺 𪜻 𪜼 𪜽 𪜾 𪜿 𪝀 𪝁 𪝂 𪝃 𪝄 𪝅 𪝆 𪝇 𪝈 𪝉 𪝊 𪝋 𪝌 𪝍 𪝎 𪝏 𪝐 𪝑 𪝒 𪝓 𪝔 𪝕 𪝖 𪝗 𪝘 𪝙 𪝚 𪝛 𪝜 𪝝 𪝞 𪝟 𪝠 𪝡 𪝢 𪝣 𪝤 𪝥 𪝦 𪝧 𪝨 𪝩 𪝪 𪝫 𪝬 𪝭 𪝮 𪝯 𪝰 𪝱 𪝲 𪝳 𪝴 𪝵 𪝶 𪝷 𪝸 𪝹 𪝺 𪝻 𪝼 𪝽 𪝾 𪝿 𪞀 𪞁 𪞂 𪞃 𪞄 𪞅 𪞆 𪞇 𪞈 𪞉 𪞊 𪞋 𪞌 𪞍 𪞎 𪞏 𪞐 𪞑 𪞒 𪞓 𪞔 𪞕 𪞖 𪞗 𪞘 𪞙 𪞚 𪞛 𪞜 𪞝 𪞞 𪞟 𪞠 𪞡 𪞢 𪞣 𪞤 𪞥 𪞦 𪞧 𪞨 𪞩 𪞪 𪞫 𪞬 𪞭 𪞮 𪞯 𪞰 𪞱 𪞲 𪞳 𪞴 𪞵 𪞶 𪞷 𪞸 𪞹 𪞺 𪞻 𪞼 𪞽 𪞾 𪞿 𪟀 𪟁 𪟂 𪟃 𪟄 𪟅 𪟆 𪟇 𪟈 𪟉 𪟊 𪟋 𪟌 𪟍 𪟎 𪟏 𪟐 𪟑 𪟒 𪟓 𪟔 𪟕 𪟖 𪟗 𪟘 𪟙 𪟚 𪟛 𪟜 𪟝 𪟞 𪟟 𪟠 𪟡 𪟢 𪟣 𪟤 𪟥 𪟦 𪟧 𪟨 𪟩 𪟪 𪟫 𪟬 𪟭 𪟮 𪟯 𪟰 𪟱 𪟲 𪟳 𪟴 𪟵 𪟶 𪟷 𪟸 𪟹 𪟺 𪟻 𪟼 𪟽 𪟾 𪟿 𪠀 𪠁 𪠂 𪠃 𪠄 𪠅 𪠆 𪠇 𪠈 𪠉 𪠊 𪠋 𪠌 𪠍 𪠎 𪠏 𪠐 𪠑 𪠒 𪠓 𪠔 𪠕 𪠖 𪠗 𪠘 𪠙 𪠚 𪠛 𪠜 𪠝 𪠞 𪠟 𪠠 𪠡 𪠢 𪠣 𪠤 𪠥 𪠦 𪠧 𪠨 𪠩 𪠪 𪠫 𪠬 𪠭 𪠮 𪠯 𪠰 𪠱 𪠲 𪠳 𪠴 𪠵 𪠶 𪠷 𪠸 𪠹 𪠺 𪠻 𪠼 𪠽 𪠾 𪠿 𪡀

l^wq-mε wuñ yĭa-tšha-neñ ʔyih-vih ŋuñ-ŋuñ ʔyeñ ɛih mo-w-thĭuñ lɛ-vĭuñ-sɛ

焰眼　主　夜叉王　衆生　あらゆる　禱　悉く　觀察する　大悲智

殲姦殺鼎

mbŷe-lhi-ŋaŋ rir

解脱門 得る

焰眼主夜叉王があらゆる衆生を悉く觀察し、大悲智解脱門を得る(華Ⅲ, 5, 20-21)

また、b)のグループでは目的語に動詞句をとった例一つを除いて、全てが無生名詞であった。例：

(25) 屏雙 織奴靴端 疏繆翅羽 媛 律 敝緞

tšhɪh-BZɪɸN nɪ-m^wɪh-nžan-tseɪ tsɪ wɪɸh ʔi-tshɪeɪ kɪɕ thaɪ pɪɸ-ɕkiɛ

その時 普賢菩薩 これ 義 重説する 欲する 仏 威力

その時、普賢菩薩はこの義を重説せんと欲し、仏の威力によって

龍 鳳 舞 獅 游 魚 龍 舟

mbĩuñ šĩa-lię mow-thĩuñ tãñ-nq rĩr-tshĩeñ

-によつて 十方 觀察する 偈言 pf. -説く

十方を觀察し偈言を説いた

(華VII, 10, 13-14)

(類例Ⅶ, 12, 15-17 Ⅶ, 14, 1-2 Ⅶ, 15, 2-4 Ⅶ, 18, 17-18 Ⅶ, 20, 3-5 Ⅶ, 21, 10-11)

VIII, 2, 3-4 VIII, 3, 8-9 VIII, 4, 15-16 VIII, 6, 4-5 VIII, 7, 13-14 VIII, 9, 1-2 VIII, 10, 2-4

VIII, 12, 12-13)

目的語に動詞句をとった例：

(26) 麋麋麋 麋麋 麋麋 麋麋 麋麋 麋麋 麋麋 麋麋

ngi-ngε-ndžiwon ɣɣar-neŋ thaŋ ɣuŋ-ɣuŋ tɔŋ-šɿa ɤiŋ ?-neŋ mow-thɿuŋ

星宿幢 皇王 仏 あらゆる 出現する 悉く親しみ近づく 觀察する

星宿幢皇王はあらゆる仏が出現し悉く近親するのを觀察し

孺荪 孺孺孺孺 孺孺孺孺

ʔyih-vʷih ʔyeh riur-rar tšǝr-ʔyǝ mbǝ-lhi-ŋaŋ rir

衆生 誦 調伏する 方便 解脱門 得る

衆生を調伏する方便の解脱門を得る

(華 II, 12, 9-11)

2. 有生性

2. 1 有生性 (animacy) とは、諸言語における様々な統語論的な分裂現象に關与する名詞句の階層のことである。ごく大雑把に言って、名詞句には、最上位から最下位に向かって、人間>動物>無生物というような順序をなす階層がみられる。

例えば、日本語では「いる」と「ある」という二つの存在動詞があり、相補分布をなしている。この二つの動詞は、主語が人間または動物であるか、それ以外かで使い分けられる。また、英語では、代名詞の三人称単数形は、原則的に人間名詞には *he* または *she*、それ以外には *it* が用いられる。

2. 2 Comrie(1981,1989[1992])は、「直接目的語の分裂型格標示を制御する」パラメーターとして有力なものに有生性と定性(definiteness)を挙げている。

他動詞構文には、A [=agent 動作主]とP [=patient 被動者]という2つの項目に関連した情報の流れがある。原則として、AとPのどちらも有生あるいは定性になり得るわけだが、実際の談話では、AからPへの情報の流れは、有生性の高い方から低い方へ、また、定性の度合の高い方から低い方へという情報の流れと相関する強い傾向が認められている。言い換えれば、最も自然な他動詞構文とは、有生性と定性の度合に関して、Aが高く、Pが低いものである。そして、このパタンからの逸脱は、より有標な構文を生むことになる。すなわち、情報の流れの方向に関してより有標な構文は、形式的にもより有標になることが期待される。つまり、諸言語には、Aが有生性もしくは定性に関して低いこと、あるいは、Pが有生性もしくは定性に関して高いことを標示する特別な手段があるという予測が成り立つのである。(Comrie,1981,1989 訳:松本.山本)

2. 3 ロシア語では、男性名詞の単数形において、活動体(人、動物)と不活動体(それ以外)の区別があり、対格の形式が活動体では生格(=属格)と、不活動体では主格と同型になる。次に示すロシア語の例では、мальчик ”少年”、стол ”机” はともに男性名詞であるが、対格形が異なっている。例:

(27) a. Это мальчик. / Он виде-л мальчик-а.
これ 少年sg.nom. pron. 3-sg.nom. 見δpast-m. 少年sg.acc.
これは少年です。 / 彼は少年を見た。

(28) b. Это стол. / Он виде-л стол.
これ 机sg.nom. pron. 3-sg.nom. 見δpast-m. 机sg.acc.
これは机です。 / 彼は机を見た。

皆島(1993)によれば、日本語でも有生性の高い名詞、定性の高い名詞では、格助詞「を」の省略の頻度が低いという。

2. 4 西夏語の対格標示において有生性の高い目的語に助詞 𐽄 ʔyeŋ が後置されるのも、ロシア語の例や日本語の例と同様、有生性もしくは定性の高い被動者を標示する特別な手段であると考えられる。

また、与格標示において助詞 𐽄 ʔyeŋ が用いられるのも、これらの位置には有生性の高い名詞が置かれる可能性が高く、情報の流れに対して有標だからであろう。

3. なぜ分裂型格標示に有生性が関与するのか

今までに述べてきた、直接目的語の分裂型格標示を制御するパラメーターとしての有生性の関与に加えて、西夏語の語順も、有生名詞である被動者に助詞 𐽄 ʔyeŋ を後置させる原因の一つになっているのではないと思われる。

3. 1 西夏語の例を見る前に、日本語を例にとってこの問題を考えてみたい。

(29) 太郎 男 殴った。 (30) 男 太郎 殴った。

(31) 太郎殴った男どっか逃げて行きよった。

ところが次に挙げる例では、格助詞が省略されているにもかかわらず、(31)のような曖昧性はない。例：

言うまでもなく、「俺が投げたボールがどこかへ飛んで行った」のである。

ただ、(31)の文が曖昧性を引き起こすのは、有生性の問題だけでなく、日本語の語順にも関係がある。例えば、英語や現代漢語では、この種の曖昧性はないであろう。次に挙げる例では、どちらも a が「太郎が殴った男はどこかへ行った」という意味の文であり、b が「太郎を殴った男はどこかへ行った」という意味である。例：

b The man who hit Taro ran away.

(34) a 太郎打的男人逃走了.

b 打太郎的男人逃走了.

これらSV0言語では、動詞が動作主と被動者を区別するmarkerになっており、aとbは明確に区別される。

3. 2 ここで、同様な条件の元にある西夏語の例を見てみよう。例：

(35) 𪔐𪔑𪔒𪔓𪔔𪔕𪔖𪔗𪔘𪔙𪔚𪔛𪔜𪔝𪔞𪔟𪔠𪔡𪔢𪔣𪔤𪔥𪔦𪔧𪔨𪔩𪔪𪔫𪔬𪔭𪔮𪔯𪔰𪔱𪔲𪔳𪔴𪔵𪔶𪔷𪔸𪔹𪔺𪔻𪔼𪔽𪔾𪔿𪕀𪕁𪕂𪕃𪕄𪕅𪕆𪕇𪕈𪕉𪕊𪕋𪕌𪕍𪕎𪕏𪕐𪕑𪕒𪕓𪕔𪕕𪕖𪕗𪕘𪕙𪕚𪕛𪕜𪕝𪕞𪕟𪕠𪕡𪕢𪕣𪕤𪕥𪕦𪕧𪕨𪕩𪕪𪕫𪕬𪕭𪕮𪕯𪕰𪕱𪕲𪕳𪕴𪕵𪕶𪕷𪕸𪕹𪕺𪕻𪕼𪕽𪕾𪕿𪖀𪖁𪖂𪖃𪖄𪖅𪖆𪖇𪖈𪖉𪖊𪖋𪖌𪖍𪖎𪖏𪖐𪖑𪖒𪖓𪖔𪖕𪖖𪖗𪖘𪖙𪖚𪖛𪖜𪖝𪖞𪖟𪖠𪖡𪖢𪖣𪖤𪖥𪖦𪖧𪖨𪖩𪖪𪖫𪖬𪖭𪖮𪖯𪖰𪖱𪖲𪖳𪖴𪖵𪖶𪖷𪖸𪖹𪖺𪖻𪖼𪖽𪖾𪖿𪗀𪗁𪗂𪗃𪗄𪗅𪗆𪗇𪗈𪗉𪗊𪗋𪗌𪗍𪗎𪗏𪗐𪗑𪗒𪗓𪗔𪗕𪗖𪗗𪗘𪗙𪗚𪗛𪗜𪗝𪗞𪗟𪗠𪗡𪗢𪗣𪗤𪗥𪗦𪗧𪗨𪗩𪗪𪗫𪗬𪗭𪗮𪗯𪗰𪗱𪗲𪗳𪗴𪗵𪗶𪗷𪗸𪗹𪗺𪗻𪗼𪗽𪗾𪗿𪘀𪘁𪘂𪘃𪘄𪘅𪘆𪘇𪘈𪘉𪘊𪘋𪘌𪘍𪘎𪘏𪘐𪘑𪘒𪘓𪘔𪘕𪘖𪘗𪘘𪘙𪘚𪘛𪘜𪘝𪘞𪘟𪘠𪘡𪘢𪘣𪘤𪘥𪘦𪘧𪘨𪘩𪘪𪘫𪘬𪘭𪘮𪘯𪘰𪘱𪘲𪘳𪘴𪘵𪘶𪘷𪘸𪘹𪘺𪘻𪘼𪘽𪘾𪘿𪙀𪙁𪙂𪙃𪙄𪙅𪙆𪙇𪙈𪙉𪙊𪙋𪙌𪙍𪙎𪙏𪙐𪙑𪙒𪙓𪙔𪙕𪙖𪙗𪙘𪙙𪙚𪙛𪙜𪙝𪙞𪙟𪙠𪙡𪙢𪙣𪙤𪙥𪙦𪙧𪙨𪙩𪙪𪙫𪙬𪙭𪙮𪙯𪙰𪙱𪙲𪙳𪙴𪙵𪙶𪙷𪙸𪙹𪙺𪙻𪙼𪙽𪙾𪙿𪚀𪚁𪚂𪚃𪚄𪚅𪚆𪚇𪚈𪚉𪚊𪚋𪚌𪚍𪚎𪚏𪚐𪚑𪚒𪚓𪚔𪚕𪚖𪚗𪚘𪚙𪚚𪚛𪚜𪚝𪚞𪚟𪚠𪚡𪚢𪚣𪚤𪚥𪚦𪚧𪚨𪚩𪚪𪚫𪚬𪚭𪚮𪚯𪚰𪚱𪚲𪚳𪚴𪚵𪚶𪚷𪚸𪚹𪚺𪚻𪚼𪚽𪚾𪚿𪛀𪛁𪛂𪛃𪛄𪛅𪛆𪛇𪛈𪛉𪛊𪛋𪛌𪛍𪛎𪛏𪛐𪛑𪛒𪛓𪛔𪛕𪛖𪛗𪛘𪛙𪛚𪛛𪛜𪛝𪛞𪛟𪛠𪛡𪛢𪛣𪛤𪛥𪛦𪛧𪛨𪛩𪛪𪛫𪛬𪛭𪛮𪛯𪛰𪛱𪛲𪛳𪛴𪛵𪛶𪛷𪛸𪛹𪛺𪛻𪛼𪛽𪛾𪛿𪜀𪜁𪜂𪜃𪜄𪜅𪜆𪜇𪜈𪜉𪜊𪜋𪜌𪜍𪜎𪜏𪜐𪜑𪜒𪜓𪜔𪜕𪜖𪜗𪜘𪜙𪜚𪜛𪜜𪜝𪜞𪜟𪜠𪜡𪜢𪜣𪜤𪜥𪜦𪜧𪜨𪜩𪜪𪜫𪜬𪜭𪜮𪜯𪜰𪜱𪜲𪜳𪜴𪜵𪜶𪜷𪜸𪜹𪜺𪜻𪜼𪜽𪜾𪜿𪝀𪝁𪝂𪝃𪝄𪝅𪝆𪝇𪝈𪝉𪝊𪝋𪝌𪝍𪝎𪝏𪝐𪝑𪝒𪝓𪝔𪝕𪝖𪝗𪝘𪝙𪝚𪝛𪝜𪝝𪝞𪝟𪝠𪝡𪝢𪝣𪝤𪝥𪝦𪝧𪝨𪝩𪝪𪝫𪝬𪝭𪝮𪝯𪝰𪝱𪝲𪝳𪝴𪝵𪝶𪝷𪝸𪝹𪝺𪝻𪝼𪝽𪝾𪝿𪞀𪞁𪞂𪞃𪞄𪞅𪞆𪞇𪞈𪞉𪞊𪞋𪞌𪞍𪞎𪞏𪞐𪞑𪞒𪞓𪞔𪞕𪞖𪞗𪞘𪞙𪞚𪞛𪞜𪞝𪞞𪞟𪞠𪞡𪞢𪞣𪞤𪞥𪞦𪞧𪞨𪞩𪞪𪞫𪞬𪞭𪞮𪞯𪞰𪞱𪞲𪞳𪞴𪞵𪞶𪞷𪞸𪞹𪞺𪞻𪞼𪞽𪞾𪞿𪟀𪟁𪟂𪟃𪟄𪟅𪟆𪟇𪟈𪟉𪟊𪟋𪟌𪟍𪟎𪟏𪟐𪟑𪟒𪟓𪟔𪟕𪟖𪟗𪟘𪟙𪟚𪟛𪟜𪟝𪟞𪟟𪟠𪟡𪟢𪟣𪟤𪟥𪟦𪟧𪟨𪟩𪟪𪟫𪟬𪟭𪟮𪟯𪟰𪟱𪟲𪟳𪟴𪟵𪟶𪟷𪟸𪟹𪟺𪟻𪟼𪟽𪟾𪟿𪠀𪠁𪠂𪠃𪠄𪠅𪠆𪠇𪠈𪠉𪠊𪠋𪠌𪠍𪠎𪠏𪠐𪠑𪠒𪠓𪠔𪠕𪠖𪠗𪠘𪠙𪠚𪠛𪠜𪠝𪠞𪠟𪠠𪠡𪠢𪠣𪠤𪠥𪠦𪠧𪠨𪠩𪠪𪠫𪠬𪠭𪠮𪠯𪠰𪠱𪠲𪠳𪠴𪠵𪠶𪠷𪠸𪠹𪠺𪠻𪠼𪠽𪠾𪠿𪡀𪡁𪡂𪡃𪡄𪡅𪡆𪡇𪡈𪡉𪡊𪡋𪡌𪡍𪡎𪡏𪡐𪡑𪡒𪡓𪡔𪡕𪡖𪡗𪡘𪡙𪡚𪡛𪡜𪡝𪡞𪡟𪡠𪡡𪡢𪡣𪡤𪡥𪡦𪡧𪡨𪡩𪡪𪡫𪡬𪡭𪡮𪡯𪡰𪡱𪡲𪡳𪡴𪡵𪡶𪡷𪡸𪡹𪡺𪡻𪡼𪡽𪡾𪡿𪢀𪢁𪢂𪢃𪢄𪢅𪢆𪢇𪢈𪢉𪢊𪢋𪢌𪢍𪢎𪢏𪢐𪢑𪢒𪢓𪢔𪢕𪢖𪢗𪢘𪢙𪢚𪢛𪢜𪢝𪢞𪢟𪢠𪢡𪢢𪢣𪢤𪢥𪢦𪢧𪢨𪢩𪢪𪢫𪢬𪢭𪢮𪢯𪢰𪢱𪢲𪢳𪢴𪢵𪢶𪢷𪢸𪢹𪢺𪢻𪢼𪢽𪢾𪢿𪣀𪣁𪣂𪣃𪣄𪣅𪣆𪣇𪣈𪣉𪣊𪣋𪣌𪣍𪣎𪣏𪣐𪣑𪣒𪣓𪣔𪣕𪣖𪣗𪣘𪣙𪣚𪣛𪣜𪣝𪣞𪣟𪣠𪣡𪣢𪣣𪣤𪣥𪣦𪣧𪣨𪣩𪣪𪣫𪣬𪣭𪣮𪣯𪣰𪣱𪣲𪣳𪣴𪣵𪣶𪣷𪣸𪣹𪣺𪣻𪣼𪣽𪣾𪣿𪤀𪤁𪤂𪤃𪤄𪤅𪤆𪤇𪤈𪤉𪤊𪤋𪤌𪤍

ni-sɛ-mɛ ɲɣu-nreŋ ni-ɣar ɣoŋ tsʰer-kʰɛ moʊ-thʰuŋ mbʰe-lhi-ɣar rʰr

普智眼　天王　普門　入る　法界　觀察する　解脱門　得る

普智眼天王は普門に入り、法界を觀察する解脱門を得る (華Ⅱ, 3, 9)

参考文献

- Comrie, B (1981, 1989); *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. Oxford: Basil Blackwell
(松本克己・山本秀樹 訳(1992):『言語普遍性と言語類型論 統語論と形態論』, ひつじ書房, 春日部)
- Comrie, B and S. A. Thompson (1985); *Lexical nominalisation*. In Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description* pp. 349-398, Cambridge University Press, Cambridge
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson (1980); *Transitivity in grammar and discourse*. *Language* 56 pp. 251-299
- Кеппинг, К. В. (Kepping, K. B.)
(1979); "Elements of ergativity and nominativity in Tangut", transl. by B. Comrie. in Frans Plank (ed.) *Ergativity: Towards a theory of grammatical relations*. pp. 263-77, Academic Press, London
(1980); "Переходные и непереходные глаголы в тангутском языке"
Разыскания по общему и китайскому языкознанию, Наука, Москва
(1985); *Тангутский Язык, Морфология*, Наука, Москва
(1990); <Вновь собранные записи о любви к младшим и почтении к старшим>. *Факсимиле рукописи. Издание текста, введение, переводы комментариев. Приложение <Система родства тангутов>*, Наука, Москва
(1993); "The Conjugation of the Tangut verb." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. (forthcoming)
- 李范文 (1986);『同音研究』宁夏人民出版社, 银川
- 皆島博 (1993);「日本語の格助詞「を」の省略について -有生性と定性の関与の可能性-」
『言語学論叢』1993年 特別号 (松本克己教授退官記念論文集) pp. 58-71.
筑波大学一般・応用言語学研究室, つくば
- Nevsky, N. A. (1930);「西夏助辭攷略」『内藤博士頌壽記念史学論叢』
- 西田龍雄 (1964, 1966);『西夏語の研究-西夏語の再構成と西夏語の解説』Ⅰ, Ⅱ, 座右宝刊行会, 東京
(1975, 1976, 1977);『西夏文華嚴經』Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, 京都大学文学部, 京都
(1989);「西夏語」『言語学大辞典』第2巻, 大修館書店, 東京
- 史金波 白滨 黄振华 (1983);『文海研究』中国社会科学出版社, 北京
- Софронов, М. В. (1968); *Грамматика Тангутского Языка 1, 2*, Наука, Москва
- 角田太作 (1991);「世界の言語と日本語」, くろしお出版, 東京